

翻訳

『匿名のガル年代記』 第一巻 (翻訳と注釈)

[第18章から第31章まで]

荒 木 勝

以下の翻訳は、写本ザモイスキ版、センジヴォヤ版、ヘイルスベルスキ版を検討したカロール・マレチンスキ K. Maleczyński の校訂本を用いた (Galli Anonymi Cronicae et Gesta Ducum sive Principum Polonorum [Monumenta Poloniae Historica, Nova series, Tomus II, Cracoviae 1952])。

注釈に関しては、ビェロフスキ (A. Bielowski)、マチレンスキ、プレジア (M. Plezia)、グロデツキ (R. Grodecki)、ブイノッホ (J. Bujnoch)、シラフトフスキー・ケプケ (I. Szlachtowski, R. Koepke) に拠った。注釈においては、注釈者の見解をそれぞれに

Bielowski → [Bi]、Plezia → [P]、Grodecki → [G]、Bujnoch → [B]、Maleczyński → [M]、I. Szlachtowski, R. Koepke → [S]

と略記し、以下にその見解を紹介した。それ以外の注釈は訳者のものである。参照した翻訳は、グロデツキ訳をふまえたプレジアによるポーランド語訳 *Anonim tzw. Gall, Kronika Polska*, Kraków 1982 [BIBLIOTEKA NARODOWA, Nr. 59]、ブイノッホのドイツ語訳 *Polens Anfänge, Gallus Anonymus, Chronik und Taten der Herzöge und Fürsten von Polen*, Verlag Stria, Graz-Wien-Köln 1978 である。典拠については、聖書は、シュトゥットガルト版の *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* 1969 (その翻訳は、とくにことわりがない限り、『合同訳聖書』日本聖書協会、1991年) に拠った。ギリシヤ・ラテンの古典については、*The Loeb Classical Library* に拠った。12～13世紀の東欧の年代記類については、*Monumenta Germaniae Historica. Scriptorum* に拠った。

第十八章 カジミエシによる継承と彼の追放について

ボレスワフ王の没後、ミエシコはわずかな年月しか生きていなかった。その彼がこの世を去った時¹⁾、カジミエシは幼少のまま、皇帝一族の母とともに後に残された²⁾。彼の母は、息子にその身分にふさわしい教育を授け³⁾、又女の流儀で王国を立派に統治したが、裏切者達は⁴⁾、嫉妬に駆られて王国から彼女を追放した⁵⁾。そしてその少年を、本心を隠す欺瞞的な策として王国に留め置いた。カジミエシが成長して成人となり、統治を始めようとした時⁶⁾、悪意ある者達は、彼が母に対する無法な仕打に復讐するのではないかと恐れて⁷⁾、カジミエシに背き⁸⁾、彼にハンガリアへの退去を強制した。

さて、当時、聖ステファンがハンガリアを治めていたが⁹⁾、彼は、脅迫と甘言をもちいてハンガリアをはじめてキリスト教の信仰に改宗させた。聖ステファンは、ポーランドの最も頑強な敵、ボヘミア人に対して、和平と友好の絆を結んでいたので、生きている間は、彼らを慮って、カジミエシに自由を与えることはなかった¹⁰⁾。聖ステファンがこの世から去ると、ピョートル・ベネチアニンがハンガリアの王国を受け継いだ¹¹⁾。彼はバザリアの聖ペトロ教会の建設に取りかかったが¹²⁾、その教会は、どの王も今日に至るまで建て始めた時の規模で完成させることができなかったものである。

さて、このピョートルは、ボヘミア人に、先人達から受け継いだボヘミア人との友好をもし維持したいと思うならば、カジミエシを解放しないようにと請われた時、王に相応しい威厳ある声で答えたといわれている。「もし昔の法が、ハンガリア人の王はボヘミア人の君主の牢番であれと決めているならば、諸君達の望みのままに事を行ってもよいが。」ピョートルは憤って、このようにボヘミア人の使者に答え、彼らへの友好あるいは敵対を軽く見て、カジミエシに百頭の馬と彼に随行していた百人の騎士を与え、武器と衣服を下賜して堂々と彼を送り出し、カジミエシがどこへ赴こうと、その道を禁ずることをしなかった。カジミエシは謝意を表し、道を急いで、ほどなくゲルマン人の地に至り、母と皇帝の下に身を寄せた¹³⁾。その期間がどれ程のものかは、不明である。カジミエシは、騎士の業において、勇気に富む者との誉れを得た。しかし、しばらくは、彼と母をそっとしておこう。そして、ポーランドの荒廃と破壊についての話に立ち返ることにしよう。

(18) DE SUCCESSIONE ET DEIECCIONE
KAZIMIRI POST MORTEM PATRIS

Mortuo igitur Meschone, qui post obitum regis Bolezlaui parum vixit¹⁾ : Kazimirus cum matre imperiali puer parvulus remansit²⁾. : Que cum libere filium educaret³⁾ : et pro modo femineo regnum honorifice gubernaret, : traditores⁴⁾ eam de regno propter invidiam eiecerunt⁵⁾ : puerumque suum secum in regno quasi decepctionis obumbraculum tenuerunt. : Qui cum esset adultus etate et regnare cepisse⁶⁾ : maliciosi veriti, ne matris iniuriam vindicaret⁷⁾ : in eum insurrexerunt⁸⁾, eumque in Vngariam secedere coegerunt. : Eo namque tempore sanctus Stephanus Vngariam gubernabat⁹⁾, : eamque tunc primum ad fidem minis et blanditiis convertebat, : qui cum Bohemicis, : Polonorum infestissimis inimicis, : pacem et amicitiam retinebat, : nec eum liberum, quoadusque vixit, (eorum) gratia dimittebat¹⁰⁾ : Quo de hac vita migrante, Petrus Ueneticus Vngarie regnum recepit¹¹⁾ : qui ecclesiam sancti Petri de Bazoario inchoavit¹²⁾ : quam nullus rex ad modum inchoationis usque hodie consumavit. : Hic Petrus etiam rogatus a Bohemicis, ne Kazimirum dimitteret, : si cum eis amicitiam : ab antecessoribus receptam : retinere vellet, : voce regali respondisse fertur : Si lex antiqua diffinierit, : quod Vngarorum rex Bohemicorum ducis carcerarius fuerit, : faciam que rogatis. Et sic Bohemorum legationi cum indignatione respondens, : eorumque amicitiam vel inimiciciam parvipendens, : datis Kazimiro C equis totidemque militibus, qui eum secuti fuerant, armis et vestibus preparatis eum honorifice dimisit, : nec iter ei, quocumque vellet ire, denegavit. : Kazimirus vero gratanter iter arripiens, : ac in regionem festinanter Theutonicorum perveniens, : apud matrem et imperatorem¹³⁾, quanto tempore nescio, fuerit conversatus, : sed in actu militari miles audacissimus extitit comprobatus. : Sed paulisper eum cum matre requiescere permittamus : et ad desolationem et devastacionem Polonie redeamus.

- 1) [P] ミエシコは、1034年五月十日に没する。父ボレスワフの死後9年に満たない。
2) [P] カジミエシはその時、すでに少年 puer parvulus-mały chłopczyk ではなかった。というのは父の死去の年、彼はすでに十九歳になっていたから。

〔訳注〕マレチンスキは、この「少年」“puer parvulus”の典拠として、『創世記』四四―二〇『サムエル記上』二〇―三五、『列王記上』三―七、同一――一七、『歴代誌上』二二―五、『イザヤ書』一一―一六、を挙げているが、その意味するところは不明である。

- 3) 〔訳注〕“quae libere filium educaret”の文章の訳出については、見解が分かれている。プレジニアは、「彼の身分にふさわしい方法で教育した」と訳すが、ブイノッホは、「自由学課（リベラル・アーツ）を教育した」と訳す。
- 4) 〔P〕“traditores” (“zdrajcy”)、当時の用語法に従って、年代記作者がこう呼んだ人々、「裏切り者」は、「生れながら君主である者に対する忠誠を破った者」、すなわち彼に対する反乱を企てたり、支配者の交代を求めたりする者であった。典型的な例として第三巻、第二十章 第二十一章を参照せよ。「裏切り」“zdrada”という観念は、中世において、我々の「陰謀」 (“zdrady stanu”) より著しく広範なものであり、君主の人格や君主の法に対するすべての攻撃を含むものである。
- 5) 〔M〕リヘーザは、1034年にポーランドから追放された。
〔訳注〕リヘーザの追放の年を1031年とする説もある。D. Borawska, *Kryzys monarchii wczesnopiastowskiej w latach trzydziestych XI wieku*, Warszawa 1964. リヘーザは、まず娘達と廷臣達とともにサクソニアにある皇帝の宮廷に赴いた。生涯、王妃の称号を使うことを許された。1063年三月二十一日にブラウヴァイラーにおける自分の一族の保有する修道院において没する。エゾン家の伝承によれば、リヘーザは、ミエシコの妾の憎しみによって、離婚を強制されたとされ、王妃の称号は皇帝コンラッドに返上した、とされる。Mistrz Wincenty *Kronika polska* przełożyła i opracowała. Brygida Kürbis, Kraków 1992. p. 62.
- 6) 〔M〕ケンチシンスキによれば、1035―37年まで、単独で統治した。
- 7) 〔M〕Kadłubek (M. P. H. t.2. p. 283) “ne maternas in ipsis persequatur iniurias” 「彼の母親に加えられた不当な仕打に対して、報復が行われるのではないか」。
- 8) 〔M〕Psalm 26-12 “quoniam insurrexerunt in me testes iniqui” 『詩編』二七―一二「偽りの証人……がわたしに逆らって立ちました」。
- 9) 〔M〕聖ステファン。ハンガリー王、997年から1038年まで在位。従って、カジミエシは、ステファン王の没する前に祖国から追放された。
- 10) 〔M〕ティツ Tyc, *Z dziejów Kultury*, p. 119. ケンチシンスキ, Kętrzyński, St. *Odnawiciel*, p. 323. Konrad II 496. は、カジミエシのハンガリア滞在を否定している。バルゼル、ザグジェフスキ、グロデツキは、ガルの記述を事実とする。
- 11) 〔P〕ベネチアのオルセー家出身のピョートル。ハンガリア王としては、1038年から1041年までと1042年から1046年まで統治した。
- 12) 〔P〕この場所は、かつて、ラアバ川沿岸のヴァスヴァール Vasvár、あるいはチサ川沿岸のボルソド Borsod と同一視されてきたし、またしばしば、ハンガリア南西部のペチス Pécs (「五つの教会」の意味する語) を指すものと考えられてきた。しかしながら、カラシチョニイとレヴィツキーの指摘の方が正しい。すなわち、ここで問題となっている土地は、旧ブダ(今日のブタペストの右岸)であり、その地に、ピョートル王は、聖ペトロ寺院(1241年、タタールによって破壊された)を建立した。ハンガリア語のブダヴァール(文字通りには、ブダの丘)を、ロマンス系起源の著作家達は、十二世紀から十五世紀においてバドアリア Baduaria (Bedoara, Boduaria, Bezuara) と呼んでいる。J. Karacsony *《Szazadok》* 1897. 31. p. 291-297. T. Lewicki *Polska i kraje sąsiednie w świetle księgi Rogera*, cz. II, Warszawa 1954, p. 56-59

《*Onomastica*》1968. 13. p. 164-171

13) [M] コンラッド二世。統治は、1024年九月八日から、1039年六月四日まで。

[P] 作者がコンラッド二世（1039年没）とハインリッヒ三世（1039年 - 1056年）とのどちらを念頭においているかは不明である。

第十九章 カジミエシによるポーランド王国の復興について¹⁾

その間、近隣の王公達は、それぞれ自分の領地から出てポーランドを踏みつぶし、隣接した町や城塞を、あるいは自分の領土に併呑し、あるいは征服して土を埋め込み平地とした。ポーランドは、外国人からこのような不正と災禍を蒙ったのであるが、さらにその上に、愚かしくも、また忌むしくも自国の民に苦しめられたのである。というのは、奴隷が主人に、自由平民が貴族に対して立ち上り、自らを支配者の地位に引き上げ、逆にある者は奴隷の身に繋がれ、またある者は殺され、妻を汚され、また名誉の職も非道に略奪されたからである²⁾。さらに、カトリックの信仰から離れた者達は、涙声なしには語れないのであるが、神に仕える司教や司祭に対して反抗を企てた。聖職者のある者は、高位の身に相応しく刀で殺され、ある者は、ありふれた死に値する者のように石で撲殺された。

こうしてポーランドは遂に、異邦人によって、また自国の民によって、富も人もほとんどすべてを略奪される程の荒廃に陥ったのである。その時代に、ボヘミア人はグニエズノとポズナニを破壊し、聖アダルベルトの遺体を持ち去った³⁾。他方、敵の手から身を隠した人々、また身内の反乱を避けた人々は、ヴィスワ川の彼方、マゾフシェ地方に逃げ込んだ⁴⁾。また、今述べた都市があまりにも長い間、荒廃の中で捨てて顧みられることがなかったので⁵⁾、殉教者、聖アダルベルトと使徒聖パウロの教会の中に野獣が巣を置くという有様となった⁶⁾。この災禍は、その地のほとんどすべてに及んだと思われるので、聖アダルベルトの兄弟であり、継承者であったガウダンティは⁷⁾、その時がいつであったかは不明であるが、ポーランドを破門したといわれている。

さて、ポーランドの荒廃については、これまでの叙述で十分であろう。そしてこれらの事柄は、生れながら君主である人達に忠実に仕えなかった人々

の矯正に役立つことであろう⁸⁾。

ところで、しばらくの間、ドイツ人のもとに滞在し、そこで騎士として輝かしい名声を得たカジミエシは⁹⁾、ポーランドに帰る決意をし、そのことを母親に秘かに告げた。母親が、いまだ堅固なキリスト教徒となっていない異教の人々の所に帰らないで、母の世襲財産を平和に享受するようにとカジミエシを諫めた時、また皇帝がカジミエシに、自分の国に留まれば十分な大きさの公国を与えようと申し出た時、彼は、格言の言い回しを用い、教養ある人間として答えた。「伯父方や母方のどのような遺産でも、父の財産を領有すること程に正当で名誉なものはない」¹¹⁾。そして彼に随行した五百人の騎士とともに、ポーランドの国境を越え、さらに進んで、彼に味方する者から彼に返還された若干の城を占領し、そこから勇気と政略によって、ポモジェ人やボヘミア人、その他の近隣の部族によって占領されていた全ポーランドを徐々に解放していき、それを自分の支配の下においた¹²⁾。

さて、その後、大きな財産の付いたロシアの貴族の娘を妻とし¹³⁾、彼女から四人の息子と、ボヘミア王と婚約することとなる一人の娘とを儲けた¹⁴⁾。彼の息子達の名前は次のようであった。ボレスワフ¹⁵⁾、ウァディスワフ¹⁶⁾、ミエシコ、そしてオットーであった¹⁷⁾。しかしながら、カジミエシについての話は、最初に彼が成し遂げたことに触れることで終えようと思う。その後、彼の息子達については、最初に統治した者を、またその次に統治した者を順に紹介していくこととしよう。

(19) DE REHABICIONE REGNI POLONIE PER KAZIMIRUM¹⁾

Interea reges et duces in circuitu Poloniam quisque de parte sua conculcabat, : suoque dominio civitates quisque castellaque contigua vel applicabat, : vel vincendo terre coequabat. : Et cum tantam iniuriam et calamitatem ab extraneis Polonia pateretur, : absurdus tamen adhuc et abhominabilius a propriis habitatoribus vexabatur. : Nam in dominos servi, : contra nobiles liberati : se ipsos in dominium extulerunt, : aliis in servicio versa vice detentis, : aliis peremptis, : uxores eorum incestuose : honoresque sceleratissime : rapuerunt²⁾. : Insuper etiam a fide catholica deviantes, quod sine voce lacrimabili dicere non valemus, adversus epis-

copos et sacerdotes Dei seditionem inceperunt, : eorumque quosdam gladio quasi dignos peremerunt, : quosdam veroquasi morte dignos viliori lapidibus obruerunt : Ad extremum autem tam ab extraneis, : quam ab indigenis : ad^j tantam Polonia desolationem est redacta, : quod ex toto pene divitiis et hominibus est exuta. : Eo tempore Bohemi Gneznen et Poznan destruxerunt, : sanctique corpus Adalberti abstulerunt³⁾. : Illi vero, qui de manibus hostium evadebant, : vel qui suorum sedicionem devitabant, : ultra flumen Wysla in Mazouiam fugiebant⁴⁾. : Et tam diu civitates predictae in solitudine permanserunt⁵⁾, : quod in ecclesia sancti Adalberti martiris sanctique Petri apostoli sua fere cubilia posuerunt⁶⁾ : Que plaga creditur eo toti terre communiter evensisse, : quia Gaudentius⁷⁾, sancti Adalberti frater et successor, occasione qua nescio, dicitur eam anathemate percussisse. : Hec autem dixisse de Polonie destructione sufficiat : et eis, qui dominis naturalibus fidem non servaverunt, ad correccionem proficiat⁸⁾. : Kazimirus igitur apud Theutunicos aliquantulum conversatus, : magnamque famam ibi militaris glorie consecutus⁹⁾, : Poloniam se redire disposuit, : illudque matri secretius indicavit. : Quem cum mater dehortaretur, ne ad gentem perfidam : et nondum bene christianam : rediret, : sed hereditatem maternam pacifice possideret : et cum etiam imperator eum remanere secum rogaret¹⁰⁾, : eique ducatum satis magnificum dare vellet, : proverbialiter, ut pote homo literatus respondit : Nulla hereditas avunculorum vel materna : iustius vel honestius possidebitur quam paterna¹¹⁾ : Et¹²⁾ assumptis secum militibus quingentis Polonie fines introivit : ulteriusque progrediens, castrum quoddam a suis sibi redditum acquisivit, : de quo paulatim virtute cum ingenio totam Poloniam : a Pomoranis et Bohemicis aliisque finitimis gentibus occupatam : liberavit, : eamque suo dominio mancipavit¹²⁾. : Postea vero de Rusia nobilem cum magnis divitiis uxorem accepit¹³⁾. : de qua filios IIII unamque filiam, : regi Bohemie desponsandam : generavit¹⁴⁾. : Nomina autem filiorum eius hec sunt : Bolezlaus¹⁵⁾, Wladislauus¹⁶⁾ Mescho et Otto¹⁷⁾. Sed de Kazimiro, quid egerit primitus pertractando finiamus : et postea de filiis, quis eorum prius, : quisve posterius : regnaverit ordinabilius edicamus. :

1) [訳注] ザモイスキ版、センジヴォヤ版、ヘイルスベルスキ版それぞれに第十九章の

表題として「修道士であった（カジミエシ）」“qui fuit monachus”という文章が書き込まれている。

〔P〕“który był mnichem.”「修道士であったところの（カジミエシ）」という表現は、これが年代記作者自身に由来するのだろうか、一つの疑問を引き起こすに足るものである。もちろん、作者は（第二十一章の終部で）修道院でのカジミエシの教育については知っている。しかし、彼が修道士であったか否かについては、何も語っていない。カジミエシ・オドノヴィチュール（復興王）が修道士であったという有名な伝承は、十三世紀半ば少し前に書かれた『聖スタニスワフ小伝』の中にはじめて登場する。

- 2) 〔P〕最初のピアスト家の人々が建てた、このような形の国家に対する反乱は、短期間しか持続しなかったが、昔から「異教的反動」“reakcji pogańskiej”と呼ばれている。新しい研究は、どちらかと言えば、この現象の社会的側面に力点を置いているが、それでも、新しい信仰に反対する異教的要素の類似の反乱が、ほとんど同じ時期にハンガリアで生じた。ということに注目したい。D. Borawska, *Kryzys monarchii wczesnopiastowskiej w latach trzydziestych XI w.*, Warszawa 1964.

〔訳注〕この反乱を示唆する文書として、ブイノッホもマレチンスキも『コスマの年代記』第一卷四〇節を挙げている。事実、この年代記において1022年の出来事について次のような指摘がなされている。「ポーランドでは、キリスト教徒の迫害が行われた。」“im Polonia facta est persecutio christianorum” (M. G. H. S. t. IX p. 63) また、マレチンスキは『ロシア原初年代記』の1034年の記述も、この反乱を示すものとして挙げている。しかしながら『原初年代記』には、筆者の確認した限りではこれに関する記述は、1030年の出来事となっている。前掲書『ロシア原初年代記』一七〇ページ。Kroniki Staroruskie, Warszawa 1987. p. 98.

- 3) 〔P〕ブジェティスワフ公の手によって行われた1038年のチェコ人の略奪の襲来。
〔B〕『コスマスの年代記』第二卷第二章、第三章、第五章参照。ポーランドに対する出征は、1038年初頭から1039年八月までの期間に行われた。『コスマの年代記』によれば、アダルベルトの聖遺物の他に、五人の修道士の聖遺物、聖アダルベルトの兄弟であった大司教ガウダンティの聖遺物も、高価な黄金製の調度品とともに持ち去られた。プラハへの聖遺物の移転は、1039年九月一日に行われた。
- 4) 〔訳注〕次章参照。
- 5) 〔P〕「今述べた都市」とは、グニエズノとポズナニを指す。グニエズノのカテドラルは聖ヴォイチェフ（アダルベルト）を勧請しているし、ポズナニのカテドラルは使徒、聖ペトロを勧請している。
- 6) 〔M〕ポズナニのカテドラルの教会は聖ペトロと聖パウロの銘を持っていた。Isaias. 57-7”, super montem excelsum et sublimem posuisti cubile tuum.”『イザヤ書』五七-七、「高い山の上に、お前は床を設け」
- 7) 〔P〕ラジム・ガウダンティ。（チェコの）スワブニコヴィツ族の出で、聖ヴォイチェフの兄弟であり、同志であった。グニエズノの最初の大司教となった。ポーランドに対してなされた破門については、この年代記のこの箇所以外には、何も知られていない。
- 8) 〔P〕“domini naturales”「生まれながら（自然に）君主であった人々」とは、当時の政治用語においては、数世代前から、それゆえに、記憶の及ばない古い時代からある国を支配している王族を指している。それはポーランドにおいてはもちろん、ピアスト家であった。

- 9) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum* 7.1. "Iugurtha, . . . appetens gloriae militaris." サルスティウス『ユグルタ戦記』七——、「ユグルタは……騎士としての輝しい名声を得ようとして」
- 10) [P] コンラッド二世（没年1039年）か、ヘンリク三世（1039—1056年）か、は不明である。
- 11) [M] 実際にこの財産が存在していたか否かについて、ケンチシンスキは疑問を呈している。Kętrz. *Odnowiciel*, p. 363.
- 12) [M] 『ザクセン年代記』 *Annalista Saxo* (M. G. H. SS. VI, p. 683) によれば、1039年のことであった。バルゼルは追放されたカジミエシの帰国の年を1038年としている。[訳注] 『ザクセン年代記』には、次のようにある。「この時、ポーランド公ミエシコの息子カジミエシは、祖国に帰り、ポーランド人達から喜んで、迎えられた。ロシア王の娘を妻として二人の息子ウァディスワフとボレスワフを得た」。”His temporibus Kazimer, filius Miseconis ducis Polanorum, reversus in patriam, a Polanis libenter suscipitur, duxitque uxorem regis Ruscie filiam, procreavitque duos filios Vladizlaum et Bolislaum.” Balzer, *Genealogia* p. p. 83-89.
- 13) [M] マリア・ドブローネーガ。バルゼルによれば (Balzer, *Genealogia*, p. 88) ヴラディミール（キエフ大公）の娘。ケンチシンスキによれば (Kętrzyński St. *Na marginesie*, p. 8) ヤロスワフ賢公の娘である。結婚式は1038年か1039年に行われた。ロシア人の年代記によれば、それは1043年に催されたとされる。
- 14) [M] シフィエントスワヴァ。1041年—4年に生れ、1226年に没する。ボヘミア王ヴラティスラウとの結婚は、1062年になされた。
- 15) [P] ボレスワフ二世シミアウイ。1039年に生れる。ポーランド公であり、ポーランド王となった。
- 16) [P] ウァデクスワフ・ヘルマン。1040年に生れ、ボレスワフ二世の継承者となった。
- 17) [P] ミエシコとオットー。1045年から1048年に生れ、夭折した。

第二十章 騎士ミエスワフおよびマゾフシェ人との戦について¹⁾

さて、祖国を解放し、それを手中に収め、また異邦の部族を追放した後でも、カジミエシには、自分の部族や、古来からの法によって臣従してきた自分の臣下達を断固として追放するという仕事が多量に残されていた。さて、父ミエシコの酌頭であり、家人であったミエスワフという名の男がいた²⁾。父の死後、自らマゾフシェ部族の君主と称し、マゾフシェの軍司令官として振る舞っていた。ところでその当時、マゾフシェは³⁾、前に述べたように、以前その地に逃げてきたポーランド人によって大変に人口が多くなったので、耕地は農民にとって、牧草地は家畜にとって、土地は住民にとって、もはや十分に広くはなかった。そこで、ミエスワフは、自分の軍隊の大胆さを信じ、

一一三
一一二

破滅的な功名心の野望によって盲目にされ、傲慢、無謀にも、どのような法によっても、また自然によっても自分の手に入らないものを得ようと考えた⁴⁾。それゆえ、あまりにも大きな傲慢、不遜の心に登りつめたので、カジミエシに臣従することを拒んだばかりか、さらに武器と策略によって彼に反抗するに至ったのである。それに対して、カジミエシは、父の僕であると同時に自分の僕でもある者がマゾフシェを力づくで横領するのを憤り、もし自分の領土としてマゾフシェを要求しなければ、重大な厄災と危険が自分に迫ることになるのではないかと判断して、数はわずかだが戦の技に優れた軍勢を集めて干戈を交え、ミエスワフを戦死させ、勝利と平和と祖国全体を凱旋のうちに手に入れた⁵⁾。

ところで、かの地では、マゾフシェ人の大きな虐殺があったといわれており、戦場と川岸の絶壁が今日までその事を物語っている⁶⁾。また、その場所は、カジミエシ自身が激しく剣で打ちかかっていき、疲れ果て、肩や胸全体や顔を流血によって汚した所でもあった。カジミエシは、さらに逃げてゆく敵を単身で追跡したので、自分の味方の者から助けを受けなければ、あやうく戦死するところであった。しかし、身分は高くはないが、カジミエシの戦友であった一人の騎士が、気高くも死ぬところであった者に助けの手を差しのべたのである。それゆえ、後にカジミエシは、この行為に対して、彼に大いに報いたのであった。すなわち、彼に町を与え、身分においても彼を貴族に引き上げた。この戦において、マゾフシェ人は三十部隊を保持していたが、カジミエシはやっと三部隊しか率いていなかった⁷⁾。なぜなら、先に述べたように、ポーランド全体がほとんど荒廃の極みに達していたからである。

(20) DE PRELIO CUM MECZZLAUO (ET) CUM MAZOUITIS¹⁾

一
二
三
四
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

Igitur eliberata patria et expugnata, profugatisque gentibus exterorum, : non minor Kazimiro restabat hostilis profugatio sue gentis suorumque iure proprio subditorum. : Erat namque quidam Meczslauus²⁾ nomine, pincerna patris sui Meschonis et minister, : post mortem ipsius Mazouie gentis sua presumptione princeps existebat et signifer. : Erat enim eo tempore Mazouia Polonis illuc antea fugientibus³⁾, ut dictum, in tantum

populosa, : quod agricolis rura, : animalibus pascua, : habitatoribus loca
 : (non satis) erant spaciosa : § Unde Meczslauus in audacia sue milicie
 confisus, : ymmo ambitione perniciose cupiditatis excecatus, : nisus est
 obtinere per presumptionis audaciam, : quod sibi non cedebat per ius
 aliquod, vel naturam⁴⁾. : Inde etiam in tantum superbie fastum
 conscenderat, : quod obedire Kazimiro renuebat, : insuper eciam ei armis
 et insidiis resistebat. : At Kazimirus⁵⁾ indignans servum patris ac suum
 Mazouiam violenter obtinere, : sibique grave dampnum existimans et
 periculum, : ni se vindicet, imminere. : collecta pauca quidem numero
 manu bellatorum : sed assueta bellis, armis congressus, : Meczslauo per-
 empto, victoriam et pacem totamque patriam triumphaliter est adeptus⁶⁾.
 : Ibi namque tanta cedes Mazouitarum facta fuisse memoratur, : sicut
 adhuc locus certaminis et precipitium ripe fluminis protestatur⁶⁾. : Ipse
 etiam ibi Kazimirus ense cedendo nimis extitit fatigatus, : brachia totum-
 que pectus et faciem effuso sanguine cruentatus, : et in tantum fugientes
 hostes solus est persecutus, : quod mori debuit a suis hominibus non
 adiutus. : Sed quidam non de nobilium genere, sed de gregariis militibus
 nobiliter opem tulit morituro, : quod bene Kazimirus sibi restituit in
 futuro ; : nam et civitatem ei contulit | et eum dignitate inter nobiliores
 extulit. : In illo enim certamine XXX acies ordinatas Mazouienses
 habuerunt, Kazimirus vero vix tres acies bellatorum plenas habebat⁷⁾, :
 quoniam, ut dictum est, tota Polonia pene deserta iacebat. :

- 1) [P] (前章に続いて——筆者)再び不正確に表現された表題は、この表題が年代記作者とは別の人物によって書かれたのではないか、との印象を与える。以下に続くこの章の内容は、明らかに、カジミエシ復興王がミエツワフおよび彼に従うマゾフシエ人と戦を交えたことを示している。マゾフシエにおけるミエツワフ公国については、J. Bieniek, *Państwo Miećława*, Warszawa 1963.
- 2) [M] メチスラウスの読み方は、ミエシコという名を示唆する。古文書類、年代記類は、ミエジヴァ Mierzwa から、ある一定の名前を引き出し、次のように読んでいる。メチスラウス Meczslaus, (古文書シャモート)、マスラウス Mazslaus, Maslaus (古文書クロバート)、カドウベック (プシェジェツキ版) はマスラウスと呼んでいる。『ポーランド君侯年代記』はこれに従っている。ロシアの年代記(『過ぎし昔の物語』1047年頃)では、この名はモイスワフ Moislaw という形をとっている。ザグジェフスキ『ボレスワフ・フロブリ』(73ページ)は、マスラウスをメスコニデスのメスコ、またはスヴァートボルクの息子であった、と考え、またその出自については、ピアスト家の別の家系に由来するものである、と考えている。
 「訳注」『過ぎし昔の物語』(1047年の頃)に次のようにある。「ヤロスラフがマゾフ

シェ人に対して兵を進め、彼らを打ち負かした。そして彼らの公モイスラフを殺し、カジミエシ（一世）に彼らを服従させた。」（前掲書、177ページ）。

3) 前章参照。

4) [P] 年代記作者の考え方によれば、統治権がある人に帰属するのは、「自然」から、すなわち相続によってか（「生れながらの君主」“*panowie przyrodzonych*”という観念）、あるいは何らかの法にもとづいて、たとえば授与法にもとづいて、である。権力に対するこれらの資格のいずれをも持っていなかったミエスワフは、篡奪者であった。

5) [P] ミエスワフに対する勝利は、1047年のことであった。

[M] 帰国したカジミエシの行為については Kętrz, St. *Odnowiciel* p. 333. Grodecki, *Dzieje Polski*, I. p. 92. ミエスワフの死については、『過ぎし昔の物語』の1047年の項が言及している。カドゥベック (*M. P. H.* II, p. 286) は、ミエスワフが仲間の謀略によって殺されたと述べている。

[訳注]カドゥベックの『ポーランド年代記』*Magistri Vincentii Chronicon Polonorum* (M. P. H. p. 286) は次のような挿話を伝えている。「他方、かの思い上った公は、ゲティ人（原プロシア人——筆者）のところに逃げ込んだ。そこでこの公は、非常に高い所に持ち上げられた。というのは、ゲティ人は、自分の仲間達を非常に多く殺されたので（カジミエシによって——筆者）、すべての罪をこの公に帰し、死んだ者のすべてに代って彼に復讐したからである。多くの拷問の後、彼を非常に高い絞首台につるし、こう言った。『高い所を望んでいたのだろう。それを掴め。』」“*Ambitionis autem ille princeps ad Getas transfugit, ubi celsiore dignitatis gradu sublimatur. Getae namque non parva suorum caede saucii, omnes in illum causam conferunt, omnium in eo necem ulciscuntur : Quem post multa demum supplicia, eminentissimo affigunt patibulo, dicentes : Alta petisti, alta tene !*”

6) [M] 河畔の戦場については、これまでヴィスワ川、あるいはヴァルタ川が考えられてきた。それに対して、レドニッツァのオストルフ湖を想定しているのが、*Kron. Wkopol.* (M. P. H. t. II. p. 662)、Sokołowski, *Ruiny na ostrowie Lednicy*, Wojciechowski, T., “O Kazimierzu Mnichu.” である。ケンチシンスキ Kętrz, St. *Odnowiciel*. pp. 335-6 は、ブク川沿いのオストルフを想定している。『ポーランド諸侯年代記』(M. P. H. t. III. p. 447) は、マゾフシエ人との戦はヴァルタ川河畔で行われた、と述べている。

7) [P] 当時の軍隊の一部隊を示すラテン語のアキエス *acies* という言葉は、この箇所でも、また他の箇所でも用いられているが、この部隊の人数については不明である。一般には三〇〇人とされている。

第二十一章 カジミエシとポモジェ人との戦について

こうしてカジミエシは、この戦において記憶に価すべき戦果を取めたが、ポモジャ人の軍勢がミエスワフを救うために駆けつけると、惑わず手勢を率

いてこの新手に向って打ちかかっていった¹⁾。というのは、このことはまっ先に彼の耳に届いていて、ミエスワフを助けに敵が来ることをあらかじめ覚悟していたからである。それからカジミエシは、慎重に事を運び、個々別々に、つまり最初にマゾフシエ人と決戦を行い、その後で、より容易にポモジェ人との戦の場に入ることができるように工夫したのである²⁾。その時ポモジェ人は武装した兵を四個軍団も率いていたが、カジミエシの方は、やっとな半個軍団をも満たぬ程度であった³⁾。しかしそれが何であろう。戦場に現われた時、カジミエシは、能弁な男、経験豊かな男として、以下のように自分の兵士達を鼓舞した⁴⁾。

見よ、待ち焦がれしこの日を⁵⁾
 そは汝等の労苦の全き終りの日
 すべての偽りのキリスト教徒を滅せし後は、
 安んじて異教徒と戦い給え
 兵の多き事、勝利をもたらすにあらず⁶⁾
 神が己の恩寵を与え給う者にこそ⁷⁾勝利宿らん
 汝等、ありし日の勇武を思い起せ⁸⁾
 しかして汝等の労苦を終らせよ。

こう言って、神の加護の下に戦闘を始め、大いなる凱旋を勝ち取った。彼はまた敬虔に満ちた極めて大きな愛情をもって聖なる教会を尊び、とりわけ修道士と聖なる修道女のための僧院の数を増やしたといわれている⁹⁾。というのは、カジミエシは年少の頃、両親によって修道院に送られ¹⁰⁾、そこで豊かな宗教的学識を身につけたからである。

(21) DE PRELIO KAZIMIRI CUM POMORANIS

Hoc itaque prelio memorabiliter superato, Pomoranorum exercitui in auxilium Meczzlao venienti, Kazimirus cum paucis indubitanter obviam properavit¹⁾. Nuntiatum namque prius illud ei fuerat, : ipsosque in auxilium inimicis advenire presciebat. : Unde prudenter disposuit singulariter prius cum Mazouiensibus diffinire, : postea facilis cum Pomoranis campum certaminis introire²⁾ : Illa enim vice Pomorani IIII legiones militum in arma ducebant, : Kazimiri vero milites nec unam dimidiam

adimplebant³⁾. : Sed quid tamen Cum perventum esset ad locum certaminis, Kazimirus, ut vir eloquens et peritus, in hunc modum suos milites cohortabatur⁴⁾ :

Ecce dies expectata primitus⁵⁾,
 Multitudo non facit victoriam⁶⁾
 Ecce finis de labore penitus,
 Sed cui Deus dedit suam gratiam⁷⁾
 Superatis tot falsis christicolis
 Mementote virtutis preterite⁸⁾
 Iam securi pugnate cum discolis.
 Et labori vestro finem ponite

Hiis dictis cum adiutorio Dei prelium introivit, : magnamque victoriam acquisivit. : Dicitur quoque sanctam ecclesiam affectu magno pietatis honorasse, : sed precipue monachos sanctarumque monialium congregationes augmentasse⁹⁾ : quoniam monasterio parvulus a parentibus est oblatus¹⁰⁾ : ibique sacris litteris liberaliter eruditus. :

- 1) [B]以下の叙述は、内容、時代の点から見て錯綜しており、その資料的価値は疑問視されている。
- 2) [M]ここで述べられている事柄の年代については、確証しえない。というのは、マスラウスは1047年に打ち負かされ、他方、ハンガリアの資料によれば、ポモジャ人の首長は、1042年にハンガリア公によって殺された、とされているから。Balzer, *Genealogia* 90-2. Kętrz, *St. Odnowiciel* 334.
 [訳注] ケンチシンスキによれば、1041年、神聖ローマ皇帝ハインリヒ三世がチェコ公ブジェティスワフを攻めた時、皇帝と同盟関係にあったカジミエシは、シロンスクからチェコに攻め込んだ。その時、カジミエシの背後を脅かすマゾフシエのミエスワフに対して、カジミエシの同盟者となったロシア公ヤロフワフがマゾフシエに攻め入った。他方、カジミエシと姻戚関係を結んだハンガリア公ベーラは、ミエスワフの同盟者のボモージェ公を討った。従って、年代記のこの叙述は、当時のポーランドをめぐる国際状況の一端を窺わせるものである。St. Kętrz. *Polska X-XI wieku*. Warszawa 1961. p. 462-472.
- 3) [P] 軍団(レギオン)は、中世ラテンにおいては、主に一千人の騎兵からなる軍隊を意味していた。しかし、ドヴィアットは、ガルの軍団を歩兵部隊と考えている。
 [訳注] 普通、古代ローマ帝国の軍制においては、一レギオは三百人から七百人の騎士および歩兵十個大隊四千人から六千人を含んだ部隊を意味したが、中世になると一レギオは約一千人の騎兵部隊を意味するようになった。
- 4) [M] 八連の十一音節トロカイックの詩。
- 5) [M] Vergilius, *Aeneis*. V-104. "Expectata dies." ヴェルギリウス『アエネアス』五一一〇四「待ち焦れし日」

- 6) [M] J. Mac. “non in multitudine exercitus victoria belli” 『マカバイ記』三一九「戦いの勝利は兵士の数の多さによるのではなく」
- 7) [M] Genesis 39-21. “dominus... dedieĩ gratiam.” 『創世記』三九一二…「主が……恵みを施し」
- 8) [M] Sallust. *Bellum Iugurthinum*. 49-2, “uti memores pristinae virtutis et victoriae.” サルスティウス『ユグルタ戦記』四九一二「かつての勇気と勝利を思い出すように」。
- 9) [M] これらの修道士達の一部はポーランドの国境の外にも存在していた。Kętr. St. Odnowiciel, p. 352. 358. 363.
[訳注] カジミエシの母リヘーザの姉がいた修道院がカジミエシと深い関係にあったことはS・ケンチシンスキの指摘するところである。Kętrz. St. op. cit., p. 520.
- 10) [M] カジミエシ復興王が修道士であったことについては T. Wojciechowski “O Kazimierza Mnich.” (*Pam. A. U. IV*) Kętrz. Odnowiciel, David, *Casimir le et Boleslas le Pénitent*, Paris 1932.
[訳注] カジミエシが教育を受けた修道院の位置については、諸説が立てられている。ディジョン、クリュニー、ブラウワイラーが挙げられているがS・ケンチシンスキは、ポーランドのベネディクト派修道院を挙げている。

第二十二章 気前良き者(シチョドリ)と呼ばれた、カジミエシの息子ボレスワフ二世の継承について

さて、こうして記憶に価するカジミエシのこれらの功績には触れてきたが、他の多くの事柄については、叙述を急ぐために沈黙してきた。しかしながら、今やカジミエシの生涯が終ろうとしているので、書き記す者にも終りの時を与えることにしよう。

さて、カジミエシがこの世に対して最後の別れを告げた後¹⁾、彼の長子で、気前が良く戦好きな男ボレスワフがポーランド王国を統治した²⁾。もしも過剰な程の名誉心と虚栄心が彼を駆りたてることがなかったならば、彼はその功績において先祖達のそれに十分に匹敵したであろう。事実、ボレスワフは、その統治のはじめの頃、ポーランド人とポモジェ人に命令を発し、グラデツの城を包囲するために³⁾、彼らを数え切れない程多く召集したが、自らの頑固で軽率な行為によって城を喪っただけでなく、ボヘミア人の奸計に陥り、辛うじてそれを免れることができたという有様であった。ボレスワフはまたポモジェ人への支配権もこのようにして喪ったのである⁴⁾。しかし、もしも怠慢が作り出した事を後に知恵によって立派に修正することができるならば、無

知のために小事を誤るということは、大したことではない。

(22) DE SUCCESSIONE SECUNDI BOLEZ-LAY DICTI LARGI KAZIMIRIDIS

Hiis igitur Kazimiri gestis memorialibus prelibatis, : aliisque compluribus sub silencio pre festinancia reservatis, : vite terminum finienti, : finem terminemus et scribendi. : Postquam itaque extremum vale Kazimirus mundo fecit¹⁾, : Bolezlauus eius²⁾ primogenitus, : vir largus et bellicosus, : Polonorum regnum rexit³⁾. : Qui sua satis gesta gestis predecessorum coequavit, : nisi quod quedam eum ambitionis vel vanitatis superfluitas agitavit. : Nam cum in principio sui regiminis et Polonis et Pomoranis imperaret, : eorumque multitudinem ad castrum Gradec obsidendum innumerabilem congregaret⁴⁾, : sue contumacie negligencia non solum castrum non habuit, : verum etiam Bohemorum insidias vix evasit, : ac Pomoranorum dominium sic amisit⁴⁾. : Sed non est mirum aliquantulum per ignoranciam oberrare, | si contigerit postea per sapientiam, que neglecta fuerint, emendare. :

1) [P] カジミエシ復興王は、1058年十一月二十八日に没す。

2) [P] ボレスワフ二世シミアウィ(勇敢王)。1058年以降ポーランド公の地位にあり、1076年に王に即位し、1079年に追放され、1081年にハンガリアにおいて没する。

3) [P] おそらくシロンスクのフラーデツ Hradec であろう。

[訳注] 今日のチェコ共和国の都市で、ほぼプラハとブレスワフの中間に位置する。

第二十三章 ボレスワフとロシア公との会見について

二二五 ところで、王ボレスワフ二世の様々な徳と寛大さについて、黙したまま省略するのは正しくないであろう。そして多くの話の内、わずかでも¹⁾、王国の統治者に模範として示すことは適切なことであろう。

さて、王ボレスワフ二世は勇敢で精力的な騎士であり、客人には好意あふれる保護者であり、気前の良い人々の中でも最も気前のよい主人であった。彼もまた、最初の偉大なボレスワフのように、占領者としてロシア人の王国の首都、壮麗なキエフの町に侵入し、自分の刀の一撃で黄金の門に記念すべ

き刻印を押した²⁾。またその地で自分の一族でもある一人のロシア人にこの国を委ね、彼を王座に就け、自分に反抗する他のすべての者を権力から遠ざけた³⁾。この世の栄光の何という光輝！騎士達の何という大胆な勇氣！王の権力の何という至高！こうして、気前の良いボレスワフは、自らが即位させた王に、「我等の所に赴き、我が国民に対する敬意の印として、和解の接吻を与え給へ」と請われた時、このポーランド人はこれに同意し、かのロシア人は彼が欲したものを差し出したのである。すなわち、ロシア人は、停泊所から会見の場所まで、気前良きボレスワフの馬の歩数を測り、その歩数の数だけの金貨を並べ置いた。それにもかかわらずボレスワフは馬から降りず、笑いながら、自分のあごひげを引き抜いて、かのロシア人に十分に高価な接吻を与えたのであった⁴⁾。

(23) DE CONVENCIONE BOLEZLAUI CUM DUCE RUTHENORUM

Non est igitur dignum probitatem multimodam et liberalitatem Bolezlaii secundi regis silencio preterire, : sed pauca de multis in exemplum regni gubernatoribus aperire¹⁾. : Igitur rex Bolezlauus secundus : audax fuit miles et strenuus, : hospitem susceptor benignus, : datorque largorum largissimus. : Ipse quoque sicut primus Bolezlauus magnus Ruthenorum regni caput, urbem Kygow precipuam hostiliter intravit, : ictumque sui ensis in porta aurea signum memorie dereliquit²⁾ : Ibi etiam quendam suis generis Ruthenum : cui pertinebat regnum, : in sede regali constituit, : cunctosque sibi rebelles a potestate destituit.³⁾ : O pompa glorie temporalis⁴⁾, : o audacia fiducie militaris, : o maiestas regie potestatis. : Rogatus itaque Bolezlauus largus a rege, quem fecerat, ut obviam ad se veniret, : sibi pacis osculum ob reverentiam sue gentis exhiberet, : Polonus quidem hoc annuit, : sed Ruthenus dedit, quod voluit. : Computatis namque Largi Bolezlaii passibus equinis : de statione ad locum convencionis, : totidem auri marcas Ruthenus posuit. : Nec tamen equo descendens, : sed barbam eius subridendo divellens, : osculum ei satis preciosum exhibuit⁴⁾. :

1) [M] Vergilius, *Aeneis* III-377 “pauca tibi e multis, . . . expediam dictis.” ヴェル

ギリウス『アエネアス』三三三七「多くの事柄のうち、わずかなことだけを……あなたに述べて」

- 2) [M] ボレスワフ・ラルグス（ボレスワフ二世シミアウィ）がキエフの都に侵入したのは、1069年五月二日である。『過ぎし昔の物語』1069年の頃参照。
[訳注]『ロシア原初年代記』（前掲書）の第十章イジャスラフの治世（1069年）の頃に次のようにある。「イジャスラフはボレスワフ（二世）とともにフセスラフに対して兵を進めた。……イジャスラフが町（キエフ）に着くと人々は礼をつくして出迎えた。……イジャスラフは、五月二日に自分の座についた。彼は食糧を手に入れるようにリャヒ（ポーランド人——筆者）を方々に行かせたので、（人々は）ひそかにリャヒを殺した。ボレスワフ（二世）は自分のリャヒの国に帰った。」
- 3) [P]「自分の一族のあるロシア人」とは、ヤロスワフ賢公の息子イジャスワフである。このことはおそらく1076年に行われた。
[B]イジャスワフを指す。ボレスワフの伯父にあたり、ヤロスワフ賢公の息子。1025年に生れ、1078年に没する。彼のキエフ支配は、1054年から1078年までである。
- 4) [P]第二十八章の話からも明らかなように、ボレスワフは、自分がこのようにイジャスワフを自分に臣従する臣下として扱っていることを強調したかったのであろう。

第二十四章 ボレスワフ・シチョドリ(気前よき者) に対するボヘミア人の瞞着

さて、ある時、ボヘミア公が¹⁾全軍を率いてポーランドに侵入し²⁾、深い森を通して戦に十分適したある平地に陣取るということがあった。それを聞いたボレスワフ・シチョドリは、精力的に敵に向って急行し、彼らを追跡し、迂回して彼らが通った道を包囲し、遮った。その日の大方が過ぎ去った時、ボレスワフは、急な追撃によって自分の兵士達を消耗させたので、使者を送って、戦場に現われるのは翌日となることをボヘミア人に告知させた。またさらに告げて、彼らボヘミア人も同地に留まって、これ以上ボレスワフを疲れさせるな、と強く請い求めて、次のように述べた。「実際、かつて、諸君達は、牧者がいない時に獲物を手に入れた飢えた狼のように³⁾、罰も受けずに森の隠れ家に逃げ込んだが、槍を手にした獵師が現われ、獵犬も諸君達の足跡を追うべく放たれた今、諸君達が広げられた網から逃がれることができるのは⁴⁾遁走や奸計によってではなく、勇気によってである」。これに対してボヘミア公は、狡猾な策略をもってボレスワフに答えた。「自分より劣った者のために心を悩ますことは、このように偉大な王に相応しいことではなかろう。しかし、明日もしも汝がカジミエシの息子であるならば、同じ場所でボヘミ

ア人の奉仕を期待することができるであろう」。そこで、ボレスワフは自分がカジミエンの息子であることを示さんとして、その場に留まり、ボヘミア人の詐欺を信じたのであった。しかし次の日が正午になった時、ポーランド人の陣営は、斥候から、ボヘミア人の前夜の逃亡によって戦は起らないとの知らせを受けた。その時になってボレスワフは、自分が欺かれていたことに怒り、すばやくモラヴィアに逃げた彼らを追い、多くの者を捕え、殺した。そして、このようにして彼らが逃亡したことに対して、自らに腹を立てながら帰還したのであった。

ところで、ここで記述に加えておくべきことがある⁵⁾。すなわち、ほとんどすべてのポーランド人が、昔ボレスワフ大王の軍隊が並はずれた愛着の念をもってつねに身につけていた甲冑の使用を廃したのはなぜか、という話である。

(24) DE DELUSIONE BOHEMORUM CONTRA BOLEZLAUM LARGUM

Contigit eodem tempore Bohemorum ducem¹⁾ cum tota suorum virtute militum Poloniam introisse,²⁾ eumque transactis silvarum condensis in quadam planicie, satis apta certamini consedissee. : Quo audito Largus Bolezlauus impiger hostibus obviam properavit, : eosque properanter transgyrando viam, qua venerant, obsidens interclusit. : Et quia plurima pars diei preterierat, : suosque properando fatigaverat, : sequenti die se venturum ad prelium per legatos Bohemis intimavit, : eosque ibidem residere, : nec se diucius fatigare, : magnis precibus exoravit. : Antea quidem exeuntes, inquit, de silva sicut lupi : capta preda famelici³⁾ : silvarum latebras absente pastore inpune solebatis penetrare, : modo vero presente cum venabulis venatore, : canibusque post vestigia dissolutis, : non fuga nec insidiis, : sed virtute poteritis : extensa retiacula devitare⁴⁾.
: At contra Bohemorum dux versuta calliditate Bolezlauo remandavit : indignum esse tantum regem ad inferiorem declinare, : sed die crastina, si filius est Kazimiri, sit paratus ibidem Bohemorum servitium expectare. : Bolezlauus vero, ut se filium ostenderet Kazimiri, ibi stando Bohemorum fallacie satisfecit. Sed die iam postera mediante, Polonorum castris ab

二
三
三

exploratoribus nuntiatur, : quod a Bohemis nocte precedenti fuga non prelium ineatur. : In eadem hora Bolezlauus delusum se dolens, acriter eos per Morauiam fugientes persequitur⁴, : captisque pluribus ac peremptis, quia sic evaserant, sibimet ipsi dedignando, revertitur. : Adnectendum est etiam rationem⁵. : que causa fere totum de Polonia loricarum usum abolevit, : quas antiquitus magni Bolezlaui regis exercitus ingenti studio frequentavit. :

- 1) [M] ウラティスワフ。1061年にボヘミア公に即位し、1092年九月八日に没する。
- 2) [M] 『過ぎし昔の物語』の1076年の頃に、ボヘミアに対してロシア人とポーランド人の遠征が行われた、とある。
[訳注] 『原初年代記』(前掲書)の1076年の頃に次のようにある。「フセヴォロドの子ヴラジミルとスヴァトスラフの子オレグがリャヒを助けて、チェヒに兵を進めた」。
- 3) [M] Hiezechiel, 22-27 "principes eius in medio illius quasi lupi rapientes praedam." 『エゼキエル書』二二―二七「高官たちは都の中で獲物を引き裂く狼のようだ」Isias 9-2 "sicut exultant victores capta praeda." 『イザヤ書』九―二「戦利品を分け合って楽しむように」
- 4) [M] Hiezechiel, 12-13 "et extendam rete meum super illum." 『エゼキエル書』一二―一三「わたしは、彼の上に網を広げ」
- 5) [訳注] 原文は、"adnectendum est etiam *rationem*, que causa abolevit." となっているが、ザモイスキ版は "*rationem*" を "*ration*" となっており、またヒルデスハイム版は "*roman*" となっている。マレチンスキは、"*narration*" とすべきであると主張し、あるいはまた全くこの "*rationem*" を削除すべきであると述べている。

第二十五章 ポモジェ人に対するボレスワフ・シチョドリの勝利

さて、ポモジェ人が突然ポーランドに侵入した時¹⁾、ボレスワフ王が遠隔の地でその知らせを聞くということがあった。彼は、異教徒の手から祖国を解放することを熱烈に願って、まだ軍勢を集め終わらないうちに、自ら先駆けて無謀にも敵を急追することをためらわなかった。川に着いた時²⁾、対岸には、異教徒の軍勢が結集していた。兵士達は橋や浅瀬を探そうともせず、武器を持ち、甲冑を身に帯びたまま渦巻く深みに身を委ねた。大胆無謀に甲冑を着た多くの者はそこに沈んでしまったが、生き残った他の者は甲冑を脱ぎ捨てて川を渡り、大損害を蒙りながらも勝利を勝ちとった。この時から、ポーラ

ンドは甲冑を捨て³⁾、敵地に侵入した者は皆、身軽になって、前に横わる川を、身に重い鉄を負わずに以前よりも安全に渡ることができた。

(25) DE VICTORIA BOLEZLAUI LARGI CONTRA POMORANOS

Contigit namque Pomoranos ex subito Poloniam invasisse¹⁾ : regemque Boleslauum ab illis remotum partibus hoc audisse. Qui cupiens animo ferventi de manu gentilium patriam liberare, : collecto nondum exercitu decrevit antecedens inconsulte nimium properare. : Cumque ventum esset ad fluvium²⁾ ultra quem turme gentilium residebant, : non ponti requisito vel vado loricati milites et armati sed profundo gurgiti se credebant. : Pluribus itaque loricorum ibi presumptuose submersis, loricas reliqui superstites abiecerunt, : transmeatoque flumine, : quamvis dampnose : victoriam habuerunt. : Ex eo tempore loricis Polonia dissuevit³⁾ : et sic expeditior hostem quisque invasit, : tutiorque flumen obiectum sine pondere ferri transmeavit. :

1) [M] この遠征は1075年に行われた。

2) [M] 『フコポルスキ年代記』 *Kronika wykopolski* (M. P. H II. 487) によれば、この川はサル川と呼ばれた。それについては、Duda, Rozwój terytorialny Pomorza 51. 参照。その本では、この川はジェシゴーニア、あるいはベルサンタとなっている。

[B] おそらくベルサンタ川であろう。

3) [M] コマスがボヘミアで同様のことを物語っている。Cosmas II. 10.

第二十六章 ボレスワフの寛大さと気前の良さについて、ある貧しい僧について

同様に、ボレスワフ二世の並はずれた寛大さについて、記憶に価すべき一つの事実を、後に来る者の模倣すべき手本として包み隠さず物語ることにしよう。

二
一
〇

ある日、ボレスワフ・シチョドリ王は、宮殿の前で貴族達とともに法廷の席についていた。そしてその場所で、広げられた敷物の上に並べられたロシア人からの貢納品や他の部族の贈物を眺めていた¹⁾。たまたまその場所に、あ

る貧しい異邦の僧が居あわせ²⁾、この豪華な宝物を見ていた。彼は驚嘆の思いを込めてこの財宝に目を凝らし、自分の哀れむべき貧しさを思って、大きな嘆息を漏らした。ボレスワフは、短気な人であったので、この僧が哀れげに嘆息を漏らしたのを聞いた時、誰か他の役人が鞭を打ったのではないかと想像して、怒りながら、次のように尋ねた。誰がこのような嘆息を敢えて漏らしたのか。誰がここでこの謀氏を敢えて鞭打ったのか、と。その時この哀れな僧は震えながら、財宝を見たという咎で王の法廷に立つことになるなら、むしろこの財宝を見なかった方がよかったと思った。

しかし、貧しき僧よ、なぜ身を隠さんとするか³⁾。

なぜ溜息をついたと白状するのをためらうのか。この嘆息はすべての哀しみを終らせ、この吐息はあなたに大きな喜びを生み出すというのに。寛大な王よ、これ以上長く貧しき僧を不安のうちに苦しめるのを止めよ。急ぎ汝の財宝を彼の肩の上に背負わせよ。

こうして、僧は、何を考えているのかと王に尋ねられて、悲しそうに吐息をつきながら、不安げに答えた。「主なる王よ、私の貧しさとあなた方の栄華、あなたがたの権威とを見て、幸福と不幸がどれ程異なっているかを見較べて、大きな悲しみに陥り、嘆息したのです。」その時、寛大な王は次のように言った。「もしも貧乏の故にあなたが溜息をついたのであれば、あなたはボレスワフ王の中に貧しさへの慰めを探しあてたことになる。あなたが溜息について眺めた財宝に近づきなさい。一掴みでできるだけの量なら、どれ程でもあなたのものとなるだろう⁴⁾。」

こうしてこの貧しき者は、宝に近づいて金銀で自分のマントを一杯にしたので、その重さのために衣が破れ、財宝が外に出てしまった。その時、寛大な王は自分の肩から衣を脱ぎ、それを財宝の袋の替りとして貧しき僧に差し出し、彼を支えてやりながら、さらに多くのものを背負わせた。寛大な王は、こうして大変多くの金銀を僧に背負わせたので、僧は、これ以上多く背負ったら、首が折れてしまうと叫んだのであった⁵⁾。

王は名誉をもって生き、

貧しき人は豊かになって立ち去りぬ。

(26) DE LIBERALITATE ET LARGITATE
BOLEZLAUI.
DE QUODAM PAUPERE CLERICO

Item unum memorabile secundi Bolezlaui factum liberalitatis eximie non celabo, : sed ad imitationis exemplum successoribus intimabo. : In civitate Cracouiensi quadam die Largus Bolezlauus ante palacium in curia residebat, : ibique tributa Ruthenorum aliorumque vectigalium in tapetis strata prospectabat¹⁾ : Contigit ibidem clericum quendam pauperem et extraneum affuisse²⁾, : tantique thesauri magnitudinem prospexisse. : Qui cum ammiratione tante pecunie illuc oculis inhereret, : suamque miseriam cogitaret, : cum ingenti gemitu suspiravit. Bolezlauus autem rex, ut erat ferus, audiens hominem miserabiliter gemuisse : et existimans aliquem camerarios percussisse, : iratus sciscitatur, qui fuerit ausus sic gemere, : vel quis presumpserit ibi quempiam verberare. : Tunc ille miser clericus tremefactus maluisset nunquam pecuniam se vidisse, : quam ea de causa regis curiam introisse. :

Sed cur miser clericelle latitas³⁾

cur indicare gemuisse te dubitas? : Gemitus iste totam tristitiam conculcabit : suspirium istud magnam tibi letitiam generabit : Noli, Large rex, noli, miserum clericellum pre timore diutius anhelare, : sed festina tuo thezauro eius humeros honerare : Igitur interrogatus a rege clericus quid cogitasset, : cum sic lacrimabiliter suspirasset, : cum tremore^{pp} respondit : Domine rex, meam miseriam, : meamque paupertatem, : vestram gloriam : vestramque maiestatem : considerans, felicitatem infortunio dispariliter comparando, : pre doloris magnitudine suspiravi. : Tunc rex Largus ait : Si propter inopiam suspirasti, : Bolezlauum regem paupertatis solacium invenisti. : Accede itaque ad pecuniam, quam miraris, : et sit tuum quantumcumque uno honore (deportare) plus conaris⁴⁾. : Et accedens ille pauperculus auro et argento cappam suam tantum implevit, : quod ex nimio pondere rupta fuit et eadem pecunia visum cepit. : Tunc rex Largus de collo suo pallium extraxit, : illudque clerico pauperi pro sacco pecunie porrexit, : eumque iuvans melioribus honeravit. : In tantum enim clericum auro et argento rex

Largus honeravit, : quod sibi collum dissolvi clericus, si plus poneret, exclamavit⁵⁾. : Rex fama vivit, : ditatus^m pauper abivit.

- 1) [P] この章で述べられている挿話は、我が国の文学の中で非常に人気のあるものである。A・ゴウビエフは、『ボレスワフ・フロプリ』（第三部「悪い日々」第一巻）において、ドイツ諸公の買収の場面に巧みにこの挿話を用いている。
- 2) [P] 「クレリクス」"clericus" は、言うまでもなく、当時、聖職者になる準備をしている若者のことを指すのではなく、聖職者一般（必ずしも司祭に限らない）を指している。この「貧しい外国の僧」"clericum quendam pauperem et extraneum" というのは、明らかに、作者自身の投影であろう。作者は、こうした方法でボレスワフ・クシヴウスティの気前の良さに訴えたいと考えたのであろう。
- 3) [M] 十一音節トロカイックの詩
- 4) [訳注] マレチンスキは、テキストの文章を "sit tuum quantumque uno honore (deportare) plus conaris." としているが、これは、『ポーランド諸侯年代記』の同種の挿話の文章に拠って、ビエロフスキ校訂の原文を修正したものである。プレジニア・ブイノッホは、このビエロフスキに依拠しており、本訳文も、この箇所はビエロフスキに依った。この原文は以下のとおりである。"sit tuum quantumque uno onere tollere conaris."
- 5) [P] カドゥベックも、また彼に従ったドゥゴーシも、この挿話を、贈り物を与えられた僧は自らの貧乏の故に重すぎる程の物を引き上げようとして実際に死んでしまった、という風に変形している。これは、陽気なガルの挿話の道徳的な解釈である。

第二十七章 ボレスワフ・シチョドリのハンガリアへの追放について

ボレスワフはまた、自分の力によってハンガリアからサロモン王を追放し¹⁾、ウァディスワフを王座に即けた²⁾。ウァディスワフは体軀も堂々としており、敬神の念も厚かった。彼は、幼少の時よりポーランドで養育され³⁾、習慣においても、生活様式においても、ほとんどポーランド人となった人である⁴⁾。

人々 語りたり、いまだかつて ハンガリアは、

かくの如き王を持ったこともなく、

彼の後には、かくの如く国土が豊かになりし時もなし、と⁵⁾

さて、ボレスワフ王がどのようにしてポーランドから追放されたかを物語るとすれば、話が長くなるであろう⁶⁾。しかし、これだけのことは物語っても許されるであろう。すなわち、塗油された者は、塗油された者に対して⁷⁾、いかなる罪であっても、彼に肉体的な罰を加えることは許されないのである⁸⁾。

ボレスワフが罪に対して、罪を以って応え、司教の裏切りに対して⁹⁾四肢切斷を敢えて行った時¹⁰⁾、これは彼に大いなる厄災をもたらした。もちろん、司教の裏切りを弁解しようとは思わないし、このように醜く自己弁護しようとする王を甘やかすつもりはない。この問題は不問のままにしておこう¹¹⁾。そして彼がどのようにしてハンガリアに受け入れられたかを物語ることにしよう¹²⁾。

(27) DE EXILIO BOLEZLAUI LARGI IN VNGARIAM

Ipsa quoque Salomonem regem de Vngaria suis viribus effugavit¹⁾, : et in sede Wladislauum²⁾, sicut eminentem corpore, : sic affluentem pietate : collocavit. : Qui Wladislauus ab infancia nutritus in Polonia fuerat³⁾ : et quasi moribus et vita Polonus factus fuerat⁴⁾. :

Dicunt talem nunquam regem Vngariam habuisse,

Neque terram iam post cum fructuosam sic fuisse⁵⁾.

Qualiter autem rex Bolezlauus de Polonia sit eiectus longum existit enarrare⁶⁾, : sed hoc dicere licet, quia non debuit christus in christum⁷⁾ peccatum quodlibet corporaliter vindicare⁸⁾. : Illud enim multum sibi nocuit. : cum peccato peccatum adhibuit, : cum pro traditione pontificem⁹⁾ truncacioni membrorum adhibuit¹⁰⁾ : Neque enim traditorem episcopum excusamus, : neque regem vindicantem sic se turpiter commendamus : sed hoc in medio deseramus¹¹⁾ : et ut in Vngaria receptus fuerit disseramus¹²⁾. :

1) [M] Salomon、サロモン、ハンガリア王（在位1063年から1074年まで）。サロモンは、1077年、ボレスワフ寛大王によって追放されている。

2) [P] Św. Władysław 聖ワディスワフ（〔訳注〕我が国では、ラースロー一世と呼ばれている）。ハンガリア王で在位は、1077年から1095年まで。サモギヴァールのベネディクト派修道院の建立者。我が年代記作者は、とりわけ彼に対して暖かい見方をしている。十一世紀末の散逸している『ハンガリア人の事績』*Gesta Ungarorum*でも好意的に紹介されている。

3) [M] ポーランドで過したワディスワフ（ラースロー一世）については T. Wojciechowski, *Szkice historyczne jedenastego wieku*. Kraków 1951, p. 149, 159, 210, 221, 250, 279.

4) [P] 聖ワディスワフ（ラースロー一世）は、ハンガリア公ペーラー一世の息子であった。ペーラーはすでに1031年、二人の兄弟アンジェイ（アンドラーシュ一世）、レヴェンテとともにポーランドに身を隠した。ペーラーはポーランドで結婚し、ハンガリア

- に帰ったのは何年も後のことであった。確かに彼の息子は半ばポーランド人であったといってもよいであろう。
- 5) [M] 四の八音節トロカイックの詩、そのうち、二つの末尾に等しい押韻がなされている。
- 6) [訳注] この点については、T. Wojciechowski, *Szkice historyczne jedenastego wieku*, Kraków 1951, p. 221-252の論文 "stracenie i zeganie króla Bolesława II." を参照。
- 7) [M] ドュルゴシもこの表現を模倣している。Długosz (opera I, 65)。
- 8) [P] 塗油と結合した王の戴冠は、中世においては、半ば宗教的な行為であった。それゆえ、王は司教と同様に油塗られたる者であった。聖ステファン (ハンガリア王イシュトバーン) は、息子エメリクのための訓示において、聖書の次の言葉を想起させている。「我が油塗られたる者に触れるなかれ。」司教に体罰を課すことは、当時の観念・慣行からは前代未聞のことであったとの指摘は正当である。(T. Wojciechowski, *ibid.*, p. 329)
- [訳注] 「クリストゥス」 "Christus" とは、言うまでもなく、「油注がれたる者」を指す言葉であり、ヘブライ語の「メシアハ」 "מָשִׁיחַ" から由来している。プレジニアの注にも触れられている「油注がれたる者に触るなかれ」は、おそらく、『サムエル記上』第二十四章、および第二十六章を典拠としているであろう。「ヤハウェの油注がれたる者に手を下して、だれが罰を免れようか。」 "מִי יִשְׁלַח יָדוֹ בְּמָשִׁיחַ יְהוָה וְנָקָה:" また、この「油注がれたる者」として、聖なる君主とともにヤハウェに仕える祭司も挙げられていることは、『レビ記』にも記されているところである。『レビ記』第四章、第六章参照。
- 9) [P] 司教。クラコフ司教スタニスワフ (1072年—1079年)。1253年に列聖された。スタニスワフが王に対して、どのような犯罪を犯したのか、また彼らの闘争の背景は何であったのか、に関する問題は学問的にくりかえし議論されてきたところであるが、これらの点は、次の論文が抱括的に取り上げている。M. Plezia, *Do okół sprawy św. Stanisława, Studium Źródłoznawcze*, Analecta Cracoviensia 1979, XI, p. 251-413。
- 10) [M] 王と司教との不和は、ボヘミア公ヴラティスワフが王に送った手紙の中で言及されている (*M. P. H.*, I s. 365)。
- [訳注] ボヘミア公ヴラティスワフの手紙の関連箇所は次のようである。"Audivimus quoque, quia inter vos et fratrem vestrum episcopum sit aliqua dissensionis macula;" (*ibid.*,) 「また私達は、あなたがたと司教との間に、何かの対立点があると聞いている。」
- 11) [M] Sallust, *Bellum Catilinae* 19-5 "non eam rem in medio relinquemus." サルスティウス『カティリナ戦記』一九—五「我々はこの問題を未決のままにしておこう。」
- 12) [B] 作者はここでは、ポーランドにおける1079年と1080年の出来事についてあいまいな示唆をしているだけである。王とクラコフ司教スタニスワフ (1072—1079年) との間には、重大な対立があった。司教の最後の時期、王自ら司教を非難し、剣で彼を殺した。すでにボヘミアのヴラティスワフ二世の義兄ボレスワフにあてた1074年の手紙は、王と司教との間の不和について語っている。("dissensionis macula, dissensionis scandalum"), *M. P. H.*, t. I, p. 365, Boczek, *Codex dipl. et epist. Moraviae* I, p. 177 司教スタニスワフが王の行状について王を繰り返し非難したということは考えられる。後の伝承はそう述べているが、ガルはそれについて何も記していない。ま

た、司教が王に対する貴族の反乱に関与した時、王の司教に対する憎悪が生じたというとも考えられる。というのは、ガルが罪 *peccatum* について語る時、裏切り、裏切り者（“*neque enim tratitorem episcopum excusamus*”）といているからである。……ボレスワフはスタニスワフを殺害した後ただちにポーランドを追われたにちがいない。彼は1081年頃外国の地で没した。後の伝承によると、彼はハンガリアで自分の犬にかみ殺されたという。また別の伝承によれば、死に到るまでケルンテンのオシアフ修道院の贖罪者として生きていたという。その場所には、中世後期の石の銘が彼についての追憶を刻んでいる。しかしまたその銘は伝承の不確かさをも示している。Rex Boleslaus Poloniae occisor S. Stanislai episcopi. (R. Roepell: *Geschichte Polens*, Hamburg 1840, 204. Anm. 23; G. Rhode: *Kleine Geschichte Polens*, 25) マックス・グンプロヴィッチはこの対立を別様に解釈している。すなわち、スタニスワフはグレゴリウス七世の改革の敵対者であり、それゆえグレゴリウス派の目から見て裏切り者であった、とする。Max Gumplowicz, *Zur Geschichte Polens im Mittelalter*, Scientiae Verlag Aalen 1969, p. 239.

[訳注] ボレスワフ・シチョドリ（二世）と司教スタニスワフとの対立の意義については、拙稿「聖スタニスワフ崇拜の形成について」（『岡山大学法学会雑誌』、第三五巻第三・四号を参照。

第二十八章 ハンガリア王ウァディスワフによるボレスワフの受け入れについて

ウァディスワフ、ボレスワフの訪れを聞きし時、
友たる情より喜びを感じつつ、
他面にて、心に怒りの情残れり、
然り、一面にて兄弟たりし、また友人たりし人を受け入れしことを喜び
り、されど、ボレスワフの弟ウァディスワフの敵にならんことを恐れた
り¹⁾

ハンガリア王ウァディスワフがボレスワフを受け入れた態度は、異邦の人や客人に対する態度ではなく、また同輩者が同輩者に対する態度でもなかった。まさしく騎士が君主を、公が王を、あるいは王が皇帝を受け入れるようにボレスワフを受け入れたのであった²⁾。

ボレスワフ、ウァディスワフを己の王と呼べり、
ウァディスワフ、彼によりて王となりたるを自らも認めたり³⁾

しかしながら、ボレスワフには、虚栄に帰せられるべき一面があった。そしてそれこそが彼の以前の徳を著しく傷つけたのであった。

国を追われし者、異国の王国に入りたる時、また農夫、一人として彼に従わざりし時⁴⁾、

ウァディスワフは謙虚な人であったから、ボレスワフを迎えに急ぎ、敬意を表して馬から降り、遠くから近づいてくる彼を待った。それにもかかわらず、ボレスワフは、温良な王の謙遜を顧みず⁵⁾、またその心の中には破滅的な高慢の情が生じた⁶⁾。ボレスワフは言う。「私が彼をポーランドで養子として育てたのだ。私が彼をハンガリアの王に即位させたのだ。それゆえ、私に対して対等の者としての敬意を払うのではなく、私が馬に乗ったままで、君侯の一人として私に接吻するのが彼には相応しい⁷⁾。」それを聞いたウァディスワフは、少しばかり不快に思い⁸⁾、道を引き返した。しかしながら、ハンガリア全土に、ボレスワフへの十分な奉仕が恭しくとり行われるように命じた。その後、和解して、互いに友人として兄弟のように再会した。しかし、ハンガリア人は、このことをより深く、より秘かに心の中に刻んだ⁹⁾。それゆえ、ボレスワフはハンガリア人の彼に対する大きな反感をさらに増し加え、それによって最後の日の訪れを早めたと言われている¹⁰⁾。

(28) DE SUSCEPCIONE BOLEZLAUI PER WLADISLAVUM REGEM VNGARORUM

Cum audisset Wladislauus Bolezlauum advenire,
Partim gaudet ex amico, partim restat locus ire,
Partim ex recepto quidem fratre gaudet et amico
Sed de fratre Wladislanuo facto dolet inimico¹⁾

Non eum recipit velud extraneum vel hospitem, vel par parem recipere
quisque solet, : sed quasi miles principem, : vel dux regem, : vel rex
imperatorem : recipere iure debet²⁾. :

Bolezlauus Wladislauum suum regem appellabat,
Wladislauus se per eum regem (factum) cognoscebat³⁾

三 In Bolezlauo tamen unum ascribendum est vanitati, : quod eius pristinae
multum obfuit probitati :

Nam cum regnum alienum fugitivus introiret,
Cumque nullus rusticorum fugitivo obediret⁴⁾

obviam ire Bolezlauo Wladislauus, ut vir humilis properabat, : eumque

propinquantem eminus equo descendens ob reverentiam expectabat. : At contra Boleslaus humilitatem regis mansueti non respexit⁵⁾ : sed in pestifere fastum superbie cor erexit⁶⁾ : Hunc, inquit, alumpnum in Polonia educavi, : hunc regem in Vngaria collocavi. : Non decet eum me ut equalem venerari, : sed equo sedentem ut quemlibet de principibus osculari⁷⁾. : Quod intendens Wladislauus aliquantulum egre tulit⁸⁾ : et ab itinere declinavit, : ei tamen servitium per totam terram fieri satis magnifice commendavit. : Postea vero concorditer et amicabile inter se sicut fratres convenerunt, : Vngari tamen illud altius et profundius in corde notaverunt⁹⁾. : Unde magnam sibi Ungarorum invidiam cumulavit, : indeque cicuius extrema dies eum, ut aiunt, occupavit¹⁰⁾. :

- 1) [P] 故意に不明瞭なこの表現の中に、次のような事実が含まれている（この点は T・ヴォイチェホフスキーが今世紀の始めに気づいたことである）。すなわち、ボレスワフ・シミアウイの弟ワディスワフ・ヘルマンは、ボレスワフに反抗してボレスワフの追放に関与し、そのことによってハンガリアの王ワディスワフの敵対者となったということである。
[M] 八連の八音節トロカイックの詩。
- 2) [P] この言葉は、まさしく封建的支配身分の全階層を示している。
- 3) [M] 四連の八音節トロカイックの詩、Pohorecki, *Rytmika* 47.
- 4) [M] 四連の八音節トロカイックの詩。
- 5) [M] Deuteronomii, 26-7 "et clamavimus ad Dominum Deum patrum nostrorum qui exaudivit nos et respexit humilitatem nostram et laborem atque angustias."
『申命記』二六-七「わたしたちが先祖の神、主に助けを求めると、主はわたしたちの声を聞き、わたしたちの卑しき地位と労苦と虐待を御覧になり」。
[訳注] 本文で「謙遜」と訳している "humilitas" は、『旧約聖書』では、"עָנִי"（アーニ）「低き卑しき貧しき地位・状態」の意味で用いられている。
- 6) [M] Verba Dierum. II. 25-19, "erigitur cor tuum in superbiam." 『歴代誌下』二五-一九「思い上がり、うぬぼれている」
- 7) [P] 第二十三章に描かれた、キエフ公イジスワフとの類似の見会を参照。
- 8) [M] おそらく母音省略を伴う二連の八音節トロカイックであろう。
- 9) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*. II-7. "Quod verbum in pectus Iugurthae altius quam quisquam ratus erat descendit." サルスティウス『ユグルタ戦記』一一七「この言葉は誰かが想像するよりも深くユグルタの心の中に沈んでいった。」
- 10) [P] ボレスワフ・シミアウイ（二世一筆者）は1080年、あるいは1081年に突然に没する。年代記作者の不明瞭な言葉は、この死が彼の生命に対する暗殺の結果であったのではないか、という疑いをひき起こす。
[M] ボレスワフ王は追放されてすぐに亡くなったと言われている。グロデツキは、彼の死亡の年を1079-80年と考え、バルゼル *Genealogia* は、他の年代記の記述に拠って、1081年と考えている。

一
二
二

第二十九章 このボレスワフの息子、ミエシコ三世について

さて、ボレスワフには、ミエシコという名の一人の息子があった¹⁾。彼は、もし嫉妬深いパルカ達が²⁾、この少年が成人となったまさにその時、彼の命の糸を断ち切らなかったならば、徳において先祖達に勝るとも劣らなかったであろう。さて、その父が没した後、この少年を育てたのは、ハンガリア王ウァディスワフであった。王は彼を息子のように、親の愛情でもって慈しんだ。確かに、この少年は、その高潔な振舞においても、その美しさにおいても、同世代のハンガリア人、ポーランド人のすべての者を凌駕し、その明らかな徴候によって、将来、統治の権力を握るであろうという希望を抱かせ、すべての人々の注目を惹いた。そこで、彼の伯父ウァディスワフは、不吉な予兆を感じながらも³⁾、少年をポーランドに帰還させ⁴⁾、彼を嫉妬深い運命の下に、ロシア人の娘と結婚させようと決意した⁵⁾。

ひげも生えていない青年は⁶⁾こうして妻を娶り、姿も美しく、非常に慎み深く、また非常に賢明に振る舞って、先祖の古い習慣を遵守したので、祖国のすべての人々に驚くべき強い愛情を抱かせた。しかし死すべきものの幸福を敵視する運命は、喜びを悲しみに変え⁷⁾、彼の美德に懸けられた希望と花のような年令を断ち切った。というのは、彼が父に対してなされた不正に復讐するのではないかと恐れた人々は、敵意に満ちて、有為の才ある少年を毒殺したといわれているからである⁸⁾。また、彼とともに飲んでいた人々は、かろうじて死の危険から逃れることができた、ともいわれている。少年ミエシコが死んだ時、ポーランド全土は、あたかも母が一人息子の死を嘆くように慟哭した⁹⁾。彼を知っていた人だけが嘆いたのではなく、彼を全く知らない人々も、悲嘆のあまり途方に眩れて、死者の棺につき従った¹⁰⁾。ミエシコを悼むために、百姓達も鋤を、牧者も家畜を捨て、職人は仕事を、労役者はその労役を先に延ばした。幼い少年も少女も、奴隷も奴婢もミエシコの葬式を涙と溜息とを交えて悼んだ。最後に、哀れな母親は¹¹⁾、痛ましい少年が骨壺に埋葬された時、一時、まるで死者の如く息も力も失せてしまい、ようやく葬式の後、司教達による扇と冷水で、正気を取りもどしたのである¹²⁾。野蛮な民の中のどのような王でも、またどのような君主でも、その死がこれ程長く哀悼の声で弔われ

たことはないであろう。また権勢ある君主達の葬式が、これ程の悲しみによって悼まれたこともないであろう。また皇帝の記念日も、これ程の悲哀の歌によってとり行われたこともないであろう¹³⁾。しかしながら、少年の哀れな埋葬については、もう沈黙することとしよう。そして、統治の権力を手にする少年にまつわる喜びの話に移ろうと思う¹⁴⁾。

(29) DE FILIO EIUSDEM BOLEZLAUI MESCHONE III

Habuit autem unum filium rex Boleslauus nomine Meschonem¹⁾, qui maioribus non esset inferior probitate, : ni Parcarum invidia puero vitale filum interromperet, pubescenti iam etate²⁾. : Illum enim puerum rex Ungarorum Wladislauus mortuo patre nutriebat, : eumque loco filii parentis gratia diligebat. : Ipse nimirum puer coetaneos omnes et Vngaros et Polonos honestis moribus et pulcritudine superabat, : omniumque mentes in se futuri spe dominii signis evidentibus provocabat. : § Unde placuit patruo suo Wladislauo³⁾ duci puerum in Poloniam *sinistro alite* revocare⁴⁾ eumque Ruthena puella fati invidentibus uxorare⁵⁾ : Uxoratus igitur adolescens inerbis⁶⁾ et formosus, sic morose, sic sapienter se habebat, : sic antiquum morem antecessorum gerebat, : quod affectu mirabili toti patrie complacebat. : Sed fortuna rebus secundis mortalium inimica in dolorem gaudium commutavit⁷⁾ : et spem probitatis : et florem etatis : amputavit. : Aiunt enim quosdam emulos timentes, ne patris iniuriam vindicaret, veneno puerum bone indolis peremisse⁸⁾ : quosdam vero, qui cum eo biberunt, vix mortis periculum evasisse. : Mortuo autem puero Meschone tota Polonia sic lugebat, sicut mater unici mortem filii⁹⁾ Nec illi solummodo, quibus notus erat, lamentabantur, : verum etiam illi, qui nunquam eum viderant, lamentando feretrum mortui sequebantur¹⁰⁾ : Rustici quippe aratra, : pastores pecora : deserebant, : artifices studia, : operadores opera : pre dolore Meschonis postponebat. : Parvi quoque pueri et puellae, : servi insuper et ancillae | Meschonis exequias lacrimis et suspiriis celebrabant. : Ad extremum misera mater¹¹⁾, cum in urna puer plorandus conderetur, : una hora quasi mortua sine vitali spiritu tenebatur, : vixque post exequias ab episcopis ventilabris et aqua frigida

一
二
〇

suscitatur¹²⁾ : Nullius enim regis vel principis exitium apud etiam barbaras nationes tam diutino merore legitur conclamatum, : nec exequie tethrarcharum magnificorum ita lugubres celebrantur, nec anniversarium cesaris ita fuerit cantu lugubri celebratum¹³⁾ : Sed de mestitia pueri sepulti sileamus : et ad letitiam regnaturi pueri veniamus¹⁴⁾ . :

- 1) [M] ボレスワフ王の息子。1069年に生れ、ハンガリアから1086年に帰って結婚し、1089年に毒殺された。Balzer, *Genealogia* p. 111.
- 2) [P] 嫉妬深いバルク達——三人の姉妹バルク達は、古典古代の神話によれば、運命の女神であった。彼女達は人間の運命を紡いだり、切ったりする老婦人として描かれている。
- 3) [M] *Cosmas* 1-34. "intrat urbem Craków sinistro omine perfidi ducis Mesconis ad convivium." 『コスマの年代記』一三四「不吉な予感を抱きながら、不誠実なミエシコ公の宴会に出るためにクラコフに入った。」
- 4) [M] ミエシコは、1086年にポーランドに帰還した。
- 5) [M] ミエシコの結婚は、1088年に行われた（『訳注』プレジニアは1089年の説に立っている）。Balzer, *Genealogia* p. 113 バウムガルテン *Généalogies* p. 10-11. は、デュルゴシ（『年代記』第一卷三九六—七）に従って、キエフ公イジスワフの娘を彼の妻とした上で、彼女をエウドキシアと呼んでいる。スタニスワフ・ケンチシンスキ *Na marginesie* は、ミエシコと叔父ウァディスワフとは同盟者であったと考えている。
- 6) [M] Horace, *Ars Poetica*, 161. "Inberbis iuvenis tandem custode remoto gaudet equis canibusque." ホラティウス『詩の技法』一六「ひげもない若者が、見張りを遠ざけて、馬と犬とを楽しんだ。」
- 7) [M] *Epistula Iacobi*, 4-9. "risus vester in luctum convertatur et gaudium in maerorem." 『ヤコブの手紙』四—九「笑いを悲しみに変え、喜びを愁いに変えなさい」
- 8) [M] ミエシコは1089年に没した。Balzer, *Genealogia* p. 111-112.
- 9) [訳注] マレチンスキは、『サムエル記下』一一二六を典拠としているが、該当の箇所は見当らない。
- 10) [M] *II Samuhelis*, 3-31. "rex David sequebatur feretrum." 『サムエル記下』三一—三一「王ダビデはひつぎの後に従った。」
- 11) [M] ボレスワフ王の妻で、その名は知られていない。結婚は1069年であった。Balzer, *Genealogia*, P. 98 バウムガルテン *Généalogies* p. 18 は、彼女の名はヴィシェスヴァヴァであり、キエフ公シフィアトスワヴの娘であると考えている。
- 12) [M] グロデツキ *Gall*, p. 14 は、ガルがこの葬儀を眼前にしたことがあると考えている。しかしティツ *Z dziejów Kultury* p. 117 はこれを否定している。
- 13) [B] ハインリッヒ五世は、1106年に破門の中で死んだ父ハインリッヒ四世のために、1111年葬儀を行った。従って人々は、ガルの葬儀に関する細部の生き生きとした描写から、彼がこの公の埋葬の儀に目撃者として参加していたと結論づけている。
- 14) [P] いうまでもなくボレスワフ・クシヴウスティを示唆している。

第三十章 ボレスワフ三世の父、ヴァディスワフの結婚について

こうして、ボレスワフ王が没し¹⁾、他の兄弟達もこの世を去った後²⁾、ヴァディスワフ公がただ一人で国を統治した。彼は、ボヘミア王ヴラティスラフ³⁾の娘で、ユデットという名の女と結婚した⁴⁾。彼女は、ヴァディスワフのために、ボレスワフ三世と呼ばれる息子を儲けた。そして彼こそ以下の叙述が明らかにしようとする我が物語の主題となる方である。

さて、今や叙述が根元から始まって、簡潔ながらも幹に及んだので、物語の目録に実の成る枝を付け加えることに筆を割き、そこに注意を向けることにしよう⁵⁾。さて、少年の未来の親となるべき二人は、それまでに子がなく、断食と祈りを熱心に行い、貧者に気前良く施物を与えた。それは、不妊の母親達に子を生む喜びを与え、ザカリアに洗礼を施し⁶⁾、すべての民をアブラハムの子孫として祝福するためにサラの胎を開いた全能の神が⁷⁾、神を畏れ⁸⁾、聖なる教会を興隆させ、正義を行い、神の栄光と民の幸福のためにポーランド王国を統治する息子を彼らに世継ぎとして与えるためであった。彼らがこれらのことを不断にとり行っていた時、ポーランドの司教フランコが彼らのところにやってきて⁹⁾、彼らに恵み深い次のような忠告を与えた。「もし私があなた方に語る事柄を心から忠実に行うならば、あなた方の願いは、必ず成就するであろう」。そこで彼らは、大変喜んで、これらの事柄について司教に耳を傾け、

子孫を得る望み抱きて

大いなる業、為さんことを約して¹⁰⁾

できる限り早く、その事柄を示してくれるように懇願した。そこで司教は言った。「ガリアの地の南マッシリアの近く¹¹⁾、ロゲン川が海に注ぐ地プロヴァンスに¹²⁾、聖エギディウスと呼ばれている一人の聖人がいます¹³⁾。かの聖人は、神に対して非常に多くの功德を積まれたので、心から彼に帰依し、彼の覚えを得た人は皆、その願い事が必ずかなえられることを知ることになります¹⁴⁾。それゆえ、少年の形をした金の像を作りなさい¹⁵⁾。王に相応しい財宝を用意し、それを聖エギディウスの下に急いで送りなさい。」ただちに純金の少年像と¹⁶⁾杯、金、銀、外衣、聖衣が用意され、信心深い使節によって¹⁷⁾、以下

の手紙とともにプロヴァンスに運ばれた。

聖エギディウスと修道士へのウェアディスワフの手紙

神の恩寵によりポーランド公となりしウェアディスワフならびに彼の正妻ユデットは、聖エギディウスに仕える敬すべき修道院長オデロン¹⁸⁾ならびにすべての修道士達に謹んで深甚なる敬意を表す。

聖エギディウスがその特別に深き敬虔の故に、他に抜きん出ておられ、また自らに与えられた神与の力によりて、進んで人を助ける救難聖人となられたことを聞き及び、子を得たいという望みのもとに、我等の心からの贈物を捧げ奉る。また我等の願いの成就のために、汝等の聖なる祈りを謹しんで懇請し奉る。

(30) DE UXORACIONE WLADYSLAUI PATRIS TERTII BOLEZLAUI

Mortuo itaque rege Boleslauo¹⁾ aliisque fratribus defunctis²⁾ Wladislaus dux solus regnavit, : qui filiam Wratislaui Bohemici regis³⁾ nomine Juditham uxorem accepit⁴⁾ que filium ei tercium Boleslauum peperit, : de quo nostra intencio titulavit, : ut tractatio que sequitur intimabit. : Nunc vero, quia succincte per arborem a radice derivando transivimus, : ad inserendum cathalogo ramum pomiferum et stilum et animum applicemus⁵⁾. : Erant enim futuri pueri parentes : adhuc carentes sobole, ieiuniis et orationi instantes, : largas pauperibus clemosinas facientes, : quatenus omnipotens Deus, qui steriles matres facit in filiis letantes, : qui Baptistam contulit Zacharie⁶⁾ : et wlvam aperuit Sare,⁷⁾ : ut in semine Abrahe benediceret omnes gentes, : talem filium daret eis in heredem, qui Deum timeret⁸⁾ : sanctam ecclesiam exaltaret⁹⁾, : iustitiam exerceret, : ad honorem Dei et salutem populi regnum Polonie detineret. : Hec incessanter illis agentibus, : accessit ad eos Franco⁹⁾ Poloniensis episcopus, : consilium salutare donans, eis sic inquit : Si que dixero vobis devotissime compleatis, : vestrum desiderium procul dubio fiet vobis. : Illi vero

libentissime de tali causa pontificem audientes, :

Atque magna se facturos spe sobolis promittentes¹⁰⁾

rem dicere pontificem quantocius exorabant. Ad hec presul : Est, inquit, quidam sanctus in Gallie finibus contra austrum iuxta Massiliam¹¹⁾ ubi Rodanus intrat mare terra Prouincia¹²⁾ et sanctus Egidius nominatur¹³⁾, qui tanti meriti apud Deum existit, : quod omnis, qui in eo devotionem suam ponit : et memoriam eius agit, : si quid ab eo petierit, : indubitanter obtinebit¹⁴⁾ : Ad modum ergo pueri ymaginem auream fabricate¹⁵⁾, : regalia munera preparate, : eaque sancto Egidio mittere festinate. : Nec mora puerilis ymago cum calice de auro purissimo fabricatur¹⁶⁾. : Aurum. argentum, pallia, sacre vestes preparantur, : que per legatos fideles¹⁷⁾ in Prouinciam cum huiusmodi litteris deferentur : :

EPISTOLA WLADISLAUI AD SANCTUM EGIDIUM ET AD MONACHOS

Wladislaus¹⁾ Dei gratia dux Poloniensis et Juditha, legitima coniunx eius O(diloni)¹⁸⁾ : venerabili abbati sancti Egidij : cunctisque fratribus humillime devotionis obsequium. Audita fama, quod sanctus Egidius prerogativa pietatis premineat dignitate : et quod promptus sit adiutor, sibi data divinitus potestate, : pro spe sobolis munera sibi nostre devocionis offerimus, : vestrasque sanctas orationes in auxilium nostre petitionis humiliter imploramus :

- 1) [M] ボレスワフ王は、1080年（グロデツキ）か、1081年（バルゼル）かに没する。
- 2) [M] ウァデイスワフ・ヘルマン。1040年に生まれ、1102年六月二日に没する。ミエシコ。1045年四月十六日に生まれ、1048年に没する。オットー。1046年に生れ、1048年に没する。
- 3) [M] ボヘミア王ヴラティスワフ。1061年に公に即位し、1092年に没する。
- 4) [P] ウァデイスワフ・ヘルマンとユデットとの結婚は、1080年頃に行われた。彼女はヴラティスワフとハンガリの公女アデライトの娘であり、ウァデイスワフ・ヘルマンの妹シフィエントスワヴァの娘ではない（『訳注』ヘルマンの妹シフィエントスワヴァはボヘミア公ヴラティスワフに1062年に嫁いでいた）。
- 5) [P] 年代記作者の主な意図は、ボレスワフ・クシヴウスティの功績を描くことであった。
- 6) [P] 『ルカによる福音書』の冒頭に述べられている物語への示唆。永年、子のいな

かったザカリヤは洗礼者ヨハネの父となった。サラはすでに老女となっていたが、イサクを生んだ。

- 7) [M] Genesis 29 31 "videns autem Dominus quod despiceret Liam aperuit vulvam eius sorore sterili permanente." 『創世記』二九—三一「主はレアが嫌われているのを見て、彼女の胎を開かれたが、妹は不妊のままであった」(『共同訳』を一部変更した。) Genesis, 28-17" et benedicentur in te et in semine tuo cunctae tribus terrae." 『創世記』二八—四「地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る」。
- 8) [M] Deuteronomii 6-2. "ut timeas Dominum Deum tuum." 『申命記』六一—二「あなたの神、主を畏れ」
- 9) [P] ポーランドの司教フランコ。通常、ボズナニ司教と見なされている。
[M] 司教フランコはボズナニの司教と考えられている。Finkel L.-K ę trzynsk St. *Galli anonymi chronicon*, 1899 p. 39, Abraham, *Organizacja*, p. 86, Grodecki, *Gall* p. 98, K ę trz. W. *Studia*, p. 311. ダヴィッドは、ポモジェの都市コウォブジェグの司教、あるいはボズナニの布教使節司教と、考えている (*La Pologne*, p. 10)。バンベルグの墓碑銘によれば (Böhmer, *Fontes* IV 569) 年は不明だが、五月二—三日に没したとされている。
- 10) [M] 二連の八音節トロカイックの詩
- 11) [M] ロダム川河口の都市マルセイユ。
- 12) [M] プロヴァンスの町サン・ジル (聖エギディウスのフランス読み——訳者) は、マルセイユとアルルからほど遠くないところにある。今日ではもう存在していない修道院については、*Goiffen abbé, Saint Gilles, son abbaye*, Nîmes 1882, Fliche A., *Aigues Mortes et Saint-Gilles*, paris 1923.
- 13) [P] 第一巻冒頭の詩の注を参照。
- 14) [M] *Cosmas* II-36 "Nullus est enim qui non obtinuit, quod sanctum Egidium fideliter petivit." 『コスマの年代記』二—三六「何であれ、聖エギディウスに懇請したものは、必ず手にすることができる。」聖エギディウス崇拜については、Rembry E., *Saint-Gilles, sa vie, ses reliques, son culte en Belgique et dans le nord de la France*, I-II, Brugges 1881; Brassinne J., *Psautier liegeois du XIII^e siècle*, Paris s. a.
- 15) [P] 「子供の大きさをした黄金の像」—十二世紀に書かれた、スペインにおけるコンポステーラの聖ヤコブの下に赴く巡礼者のため案内書、*Le guide du pèlerin de Saint-Jacques de Compostelle* (ed. J. Viellard, 1938.) は途中に立ち寄るさまざまな聖所、たとえばプロバンスの聖ジルもそうであるが、そのような聖所の様子を描いており、その中で、この聖人 (聖ジル) の棺の側に、ある高貴な人が聖人への愛情から寄進し安置した黄金の像があった、と述べている。
- 16) [M] 我々は、ほぼ1118—40年ごろにアイメクス・ビクタヴィンが編集した聖エギディウス教会素描 (cf. Viellard J., *Le guide de pèlerin de S. Jaques de Compostelle*, Maçon 1938, 44) の中に、次のような文章を読むことができる。"quidam inclytus suam imaginem auream, beatissimi confessoris amore in pede arce versus altare aureis clavis infixit, quae ad dei honorem usque in hodiernam diem ibi apparet." (「知名の上が、聴罪師への美しい愛から、自分の黄金の像を、黄金の鋌のついた祭壇に向かって棺の足元に置いた。それは、神の栄光のために今日にいたるまでそこに置かれている。」)

- 17) [M] 聖エギディウス（^{サン}聖ジル）へのウァディスワフ・ヘルマンの使節については、『コスマの年代記』第二巻三六節 *Cosma* II, 36. に次のようにある。“in quorum numero fuit Petrus, Iudithae ducissae capellanus.” 「その構成員の一人はユディット公妃付司祭ペトロであった。」フランケンシュタイン *Frankenstein*, は、その著作 *Poselsstwo Władysława Hermana do Francji* (*Przeł. Histor.* 1938. 27) で、この使節がレマン湖近くのサン・クロードの町を通過したと主張している。グモフスキ *Gumowski* は、その著書 *Biskupstwo kruszwickie* で、この使節への参加者は、司教エベルハルトとヘンリクであったと考えている。
- 18) [P] この使節が訪れた時（1085年）の修道院監督はベネディクト（1071—1091）が行っていた。オデロはその後継者（1091—1099）であった。しかしオデロはハンガリアに自らサモギヴァールに修道院支院を建て、ほぼ二十年後にこの支院に旅していく修道士達に、自分の先任者の人物像を覆い隠すことができた。
- [M] ゴイッフォン *Goiffon* は、*Saint-Gilles* p. 45-6において、聖エギディウス（^{サン}聖ジル）の修道院長を、1071—91年間はベネディクトであり、1091—1099年間はオディロンであった。としている。このオディロンは、ハンガリア王ラディスラウスの外交公文書では証人として言及されている。（*Szentpetery, Regesta regum stirpis Arpadianae* I. nr. 24).

第三十一章 ボレスワフ三世生誕のための断食と祈りについて

こうして、修道院長と修道士達は、手紙を読み¹⁾、贈物を受け取った後、贈与者に返礼の品を送り、三日間、連禱と代禱との断食を行ない、このような贈物を自分にもたらし、またさらに多くの誓願を行なった信者の願いが成就するように、そして無知なる民の上に神御自身の名の栄光が高まり、さらに神の僕エギディウスの名声が広くまた遠くまで及ぶように²⁾、全能の神の権威ある力を懇願した。

ああ善きかな神の僕よ³⁾この品を献げ奉る御方よ、
 汝の祈りを請い求める僕達の願いを成就させたまえ
 擬物の子ではなく、真の子を与えたまえ
 肉なるものに命を与えたまえ⁴⁾、この像を納めたまえ

これ以上何を言う必要があろうか。プロバンスの修道士達による断食が終らないうちに、ポーランドでは、母となった女が御子の授かりの喜びに浴していた。使者達が発発しないうちに、修道士達は、使者達の女主人の懐妊を予言した⁵⁾。修道士達の予言の成就を確信して、喜々として帰国の旅を急いだ

使者達は、事実となった御子の授かりに驚喜する。しかしその子が誕生した時には、喜びはさらに大きくなることであろう。

(31) DE IEIUNIIS ET ORATIONIBUS PRO NATIVITATE TERTII BOLEZLAUI

Perlectis itaque litteris¹⁾ : et muneribus receptis : abbas et fratres (grates) mittenti munera retulerunt : et triduanum ieiunium cum letaniis et orationibus peregerunt, : divine maiestatis omnipotentiam obsecrantes, quatenus devotionem fidelium presentialiter sibi tanta mittentium¹⁾, : multoque plura voventium, : adimpleret, : unde gloriam sui nominis apud gentes incognitas exaltaret, : atque famam Egidii^{II} sui famuli longe lateque lilataret²⁾. :

Euge, serve Dei³⁾ : caput huius materiei

Perfice servorum : que poscunt vota tuorum,

Pro puero puerum, : pro falso perfice verum

Confice carnalem, : retinens tibi materialem⁴⁾

Quid plura ? Necdum ieiunium a monachis in Prouintia complebatur : et iam mater in Polonia de concepto filio letabatur. : Nondum inde legati discedebant : et iam monachi dominam eorum concepisse predicebant⁵⁾ : Unde missi domum citius et alacrius remeantes : et presagium monachorum certum esse probantes, : de concepto filio fiunt leti, : sed de nato leciore erunt facti. :

EXPLICIT PRIMUS LIBER

- 1) [M] Sallust, *Bellum Catilinae* 47-3 "igitur perlectis litteris" サルスティウス『カティリナ戦記』四七一三「手紙を読み終えた後に」
- 2) [M] Vergilius, *Aeneis* VI-378 "long lateque per urbes" ヴェルギリウス『アエネイス』六一三七八「町々を越えて広く、遠くまで」
- 3) [M] Mattheus 25-21, 23 "euge bone serve et fidelis" 『マタイによる福音書』二五・二一、二三「忠実な良い僕だ。よくやった。」
- 4) [B] レオ詩脚のヘクサメトロ
- 5) [M] それゆえ使節は1084年に派遣されたということになる。